

第22号
Vol.8-1
2011年5月1日

Dari Kuching

アジア地域福祉と交流の会 (Asia Community Service & Exchange) 広報紙

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 1-30-9 社会福祉法人鎌泉内

TEL: 03-3426-2323 FAX: 03-3706-7242 HP: <http://ace-jps.com/>

現地事務所: 8-B Lorong Bukit Lima Timur 2D, 96000 Sibu, Sarawak, MALAYSIA.

発行人: 中澤 健 編集人: 中澤 和代 TEL&FAX: +60-84-21-7864 E-mail: kenkn@tm.net.my



ラジャン川を日に何度も往復する生活用ボート

撮影者 中澤 和代

見上げれば満天の星。こんなに沢山！サラワクの広い空、初めて見た無数の星の瞬き。地上に灯りの全くない中で、その夜は月もなく、大小さまざまな星が、辺りに仄かで確かな明かりをもたらしていました。静けさの中で、私は今ここにある、時間も自分の小さささえ感じない、自然の一部になったような贅沢な感動でした。星屑とも言われるその一つすら人間には届きません。天空も、地上の海も山も、自然はすごいです。

やがて、イバン族の人たちとの生活が日常化する中で、人の優しさ、強さ、弱さや欲、賢さなどとの出会いました。いろいろな人たち、さまざまな生き方。それを互いに知っていて、そのまま認め合う逞しさ。美しく、時に怖い自然と共に生き、打ちのめされたり克ったりして、暮らしのスタイルが出来たのでしょ。ちょっとした別れでもすぐ泣く涙もろさ、人を巻き込む笑いの素朴さが彼らの真骨頂かなと思います。

日本は今、未曾有の事態です。家族や友人、家や仕事を奪われた人たち。無くした大変さの一方、原発の怖さは将来にも続きます。原子力は本当に必要？後戻りは出来ない？明るすぎる夜や人と疎遠。日常が本当に幸せ？少し慎ましく、人との絆や自然を取り戻せば、恐らくもっと幸せなのに…。

後世の希望まで解うことなく、今年を転換のスタートの年に出来たら、犠牲となられた方々も微笑んで下さると思っています。(健)

地球が健康であるために

ベナン在住 オン クンワイ
鈴本 純子



キャメロンハイランドの有機農場

Dari Kuching 11号 でお目にかかりましたナニア幼稚園(ベナン)の鈴本純子です。この度は、日本の大地震、大津波そして原発問題と続く大災害に心よりお見舞い申し上げます。大惨事中、日本の皆様方が、我が身を投げ打って助け合われているお姿は、こちらでも大きく報道され感動の波を巻き起こしています。

ここ、ベナン在住の日本人は、母国のために自分達にも何かできないだろうかということから災害援助の企画をしマレーシアの人たちからも大きな協力を得て、一日で義援金700万円ぐらいを募ることができたようです。ナニアからも人形劇をしてわずかながらもお手伝い致しました。

また、現在幼稚園関係のもので、“希望ちゃん”という人形作りを始めました。大震災で失われたたくさんの若い尊い命のことを思いながら、現在一生懸命頑張って生きている小さい子供達の助けに少しでもなればとの願いを込めて作業を進めています。遠くにいて、祈ること意外にこれぐらいしかできませんが、できるだけ早くできるだけたくさん作って送ることができたらと思っています。

さて、今回は私の主人の仕事である、マレーシアの有機農業の様子についてお伝えします。

☆☆☆☆
日本の皆様、初めまして、オンクンワイです。私たちは、結婚後6年間アメリカやイギリ

スで福祉の仕事や農業、教育の勉強をしていました。そして1993年にマレーシアに帰って来たのですが、その頃は、“有機”という言葉は、マレーシアではほとんど知られていませんでした。でも、現在では、有機農産物を取り扱うお店も増え、スーパーマーケットでも購入できるものが増えています。このように、有機関係のビジネスが増えれば増えるほど、それに伴ってきちんと認証された有機農産物を求めるという消費者意識も加わり、認証ラベルなどが必要になってきました。

私は、コンサルタントとして20数年有機農業運動に関する教育指導に取り組んできましたが、これまではほとんど海外で仕事をしてきました。アジアの国々やアフリカ、北欧などです。でも、この数年急激にマレーシアで有機農業運動が広がり、民間団体と政府が協力してやっていく必要性から、OAM(Organic Alliance Malaysia)(マレーシア有機農業運動連盟)を仲間と一緒に立ち上げました。現在、政府が農場関係のものだけ認証していますので、OAMでは、その他のものの認証を行う方向に動いています。またトレーニングやマレー

シア中の有機関係の店舗などのダイレクトリーも作っています。OAMと政府は話し合いを繰り返しながら、これからも認証マークの規制などいろいろなことをスムーズに進めるよう努力していくつもりです。

人間が健康であるためには、地球が健康であることを考えなければなりません。農業をたくさん使ったり、必要以上にエネルギーを使い、環境のことを考えないで進んでいくと必ずその跳ね返りは自分達の所にやってきます。もちろん、現在、世界中誰もが反省を始めている危険状態になっていますが…。個々人がそれぞれが置かれた社会的責任のもとで、できることをやっていくことが大切だと思います。一人一人の力は小さくても、それぞれの前向きな意識が集まって進めば、必ず良い方向に進むと信じています。

写真は、ナニアのスタッフの有機農場見学です。ナニアでは、このキャメロンハイランドの農場から有機野菜を直接送ってもらい昼食で使っているからです。おいしいので、野菜嫌いの子供達も食べることができるようになり、大好評です。また、友人知人たちにも有機野菜をお店よりも安く購入できるように、オーダーシステムをとって販売しています。日本の提携システムに似ています。その他、有機パン、有機豆腐なども子供達の昼食に使っています。親達にもとても喜ばれ、有機の理解の広がりにも役立っています。



ナニアで制作中の“希望ちゃん”

恩師との再会

シンガポール在住
Chew Fah Yeong
秋花(フー・フー)

初めて健先生に出会ったのは、約20年前のことでした。私はまだ日本社会事業大学の一年生の時、事務室の職員に紹介されて、研究所に中澤健先生を訪ね、知り合いになりました。

光陰矢の如し、数えてみたら健先生夫婦に再会するのはもう10年ぶりです。当時シンガポール人と結婚した私をご夫婦でシンガポールまで訪ねて来られました。今年、先生の新年の手紙に“3月で70歳です。今年は来られますか？”とお誘いがあったので、我が一家は娘の学校休み、夫婦は休暇で初めてサラワク州のシブに行くことを決めたのでした。

夫妻は、シブを一周して下さいました。Wet Market(市場)を経、シブで最も高いビルSanYanを見物し、黄色のRajang River(黄色の河は中国の有名な黄河みたい)も参観しました。

翌朝、シブ市街から車で一時間程郊外のRt. Michael Jalakというロングハウスに行き、泊まりました。元校長であるロングハウスの長Michaelさんが待っていて下さいました。マレーシアに先住民族のイバン族がいるということは教科書で学んだことでしたが、今回は初めて彼らに接することができました。来客大歓迎のマイケルさんは家族を紹介し、イバン族のコーヒー、ケーキ、黒豚などをご馳走して下さいました。独特な香りの良いコーヒーにケーキを食べた娘が「美味しい！」と褒めました。好き嫌いを素直に言い、本音で言うような純真さはこどもにしか現れないことですね。

ロングハウスの周辺には、ゴムのプランテーション、米フィールド、養魚池や豚小屋などがあり、健先生と私たち一家は自然の中を散歩しながら楽しくおしゃべりができました。奥様がロングハウスで、美味しいイバン料理とローカルカレーを用意してくれました。

奥様の手作り料理をいただいて、“口福”があつて“幸福”も感じました。奥様の手伝いが出来ずに悪かった気がしましたが、母親に甘えたという気分でした。

夕食後、皆さんが共同スペースのCorridorに集まりTUAK(お酒)を飲みながらおやつを食べました。Corridorはろうか(廊下)ですが、先生もろうか(老化)していくと笑いながら半分冗談で言っていました。

ロングハウスには電気がないため、夕方の6時半から9時半まで、3時間だけ自家発電機で明るくなります。都市で育った娘が、暗くなる前に早めに寝ようと要求しました。夜空に星がまたたくロングハウスの宿泊は私達の記憶に残されることでしょう。

やつとMuhhibahへ行く日です。Muhhibahはハーモニーという意味のマレー語です。職員はメンバーのためにいろんなことを考えていました。例えば、学校で朝礼があるように、Muhhibahでも朝礼をします。朝礼を通じてマレーシアの国歌を学び、年月日をメンバーが覚える良い機会だと、職員の提案だそうです。メンバーがよりよい栄養を摂れるように、皆と一緒に野菜や果物の栽培、鶏の飼育、魚を飼っています。毎日、ドライバーがメンバーの送迎をします。ある大雨の日に車そのロングハウスに迎えに行けなかったのに、ある一人は、2時間も歩いてムヒバに来たそうです。彼はムヒバのことが大好きで、どうしてもムヒバに来たかったのでしょう。メンバーは、織りをし、その布で上手に財布、ショルダーバッグ、鉛筆ケースなどを作ります。その製品を売ったお金は、ムヒバの運営には使いません。皆と一緒に街に行き、自由に欲しい物を買

ったりレストランで食事をしたりする時に使うそうです。障害を持って、街に出られることは希望です。ムヒバの見学は短かったけれど、帰りに皆が丁寧に握手してくれました。メンバー達はニコニコ私達の手を握って親愛の情を示すことを忘れませんでした。娘は涙が出る程「またムヒバに来るのね」と何回も繰り返しました。「また来るのよ」と答えたら「何時？」としつこく質問されました。一週間は早かったのですがシンガポールに帰る前日、健先生に誕生日ケーキを贈りました。娘も健先生に下記の手紙を書きました。

Dear Professor Ken,
Thanks for inviting us to Sibul.
I like RCS & the meals which your wife cooked. I like the Payung Cafe which you recommended.
We enjoyed the stay in Longhouse.
I hope to visit Sensei again.
I wish you a happy birthday.
(Payung Cafeは店の名前。Payungは傘の意のマレー語)

先生が還暦を迎えた時お祝いをしました。10年後、もうすぐ70歳の先生と再会して、一緒にいられたことを大事にします。中国語の諺では、“人生70古来稀”と言います。先生は元気一杯で、“長命百歳”になれるように、ご健康とご多幸をお祈り致します。



メモリアル“祝古稀”

自然を分け合って暮らす 中澤 和代

環境問題が取り沙汰されるようになって久しい。現在の地球環境は、自然と人間が共存しているとは甚だ言い難く、だからこそその研究や運動も多くある。しかし、文明を享受することに慣れた人々の日常生活には結びつきにくいのが現状である。私自身の暮らしを考えても理論ではわかるが、実践となると心許ない。何もできていない。そこに今回の東日本大震災と原発事故。いよいよ世界中、全ての人が地球環境を自らの責任で守るべく真剣に取り組まねばならない時代を迎えた。現実を知るのが遅きに失したとも言える。

今、私が住むサラワクではどうだろう。「自然と環境」と一口に言っても、いろいろあるが、この時期とりあえず、水、電気、燃料を、身近な村の暮らしに結びつけて考えてみたい。

サラワクは、川が多く水が豊富で、村のロングハウス周辺にも街から水道がきている。が、人々はお金のかかる水を決して無駄には使わない。ほとんどの人は、家に水道があっても、近くの川で行水をする。夕方になると何人かの子どもたちが泳ぎや遊びでじゃれ合いつつ、石鹸で体をゴシゴシする。娘たちは、好きなシャンプー持参で頭を洗い、お母さんたちも含めて会話ははずむ。とても楽しそうだ。みんな、ここで歯も磨くし、ついでに洗濯もしてしまう。だから、川に行く時には、いつも片手に手頃なバケツをもち歩き、子どもであっても、日中着ていたものを自分で洗う。それに、みんなと一緒にだから、女性は川に入る時、誰もがカラフルな木綿のサロンを身につけ、とても華やかだ。川は流れている。いろいろなものを洗っても清潔だと言う。昔、水道がなかった時代の雨水を溜めるタンクも各家庭にあり、農具などを洗う。自然が与えるものを無駄にしない意思がそこにある。それでは電気はどうなのか？

サラワクは、2つのダムから成る水力発電で州全体の消費電力をまかなっているようだ。その一つ、バタン(大きな川の意味)アイ(水)という名の人造湖は、どこまで続くかわからない程大きく、とても美しい。海外から訪れる人々も多く、湖の途中にロングハウスの形態を模倣したヒルトンホテルがそこだけ緑に囲まれて建っている。物品の搬入には別の手段もあるようだが、宿泊者の交通手段はボートのみ。ある時、私たちは、ホテルの定期便に乗り遅れ、人の体より少し幅広な地元民のボート(4人乗り・救命胴衣装着)で、ホテルまでの15分間、湖上を移動したことが



川行水(Mandi Sungai)のひと時

ある。少し怖い気もしたが、途中、大きな木々が湖に点在し、深水中に映えてまるで幽幻郷のようであった。サラワクの人々に感嘆するのは、ダム用の人造湖に、浮かんでいるが如くのリゾートホテルを造ってしまうところだ。「この湖から出ることなく、ここに何日過ごせるか？」と質問されたことがある。「何日？うーん、相手によるかなあ、もし、ひとりでも2週間ぐらいなら…」と私は答えた。美しく素敵なこの場所でボーッと夢を見られるかも？と思ったからだ。質問したその人は、「自分はすぐ飽きる、やはり、閉じこめられるのは嫌」と言っていた。が、まあ、そんなところである。そのようにして、発電する電気、実はサラワク全土には行き渡っておらず、ロングハウス周辺は未だ、ディーゼルオイルを使った自家発電機を使用して

一日3時間だけ電気を使っている。その3時間の間に、電力が必要なこと全てを終えていなければならない。あとはローソク生活である。これも慣れるとあまり不自由を感じないから不思議。しかし、普通に電気が通るのも時間の問題。何故なら、最近、電柱が道路脇に設置され、半年後か、一年後か、という状態なのだ。そうするとそれぞれが部屋に籠もって夜おそくまでテレビを見たり、家電製品を購入する目的で男性は出稼ぎに行くだろう。家々の間に格差ができるのでは？という心配もある。「太陽と共に起き、闇とともに寝る」という自然との共存ができにくくなるだろう。水道水のように適度に賢く親しめたらいいと思う。

燃料は、時々、政府の統制が入るようだが、物価自体が安いこともあって、日本の3分の1程度の値段である。自国で輸出可能な油田を持ち、油田王国のブルネイとも近いサラワク。ある時、博物館でパネル散策をしていたら、シェル石油が、利益の一部を基金として障害者の暮らしに寄付しているらしいことを知った。自国の資源を活用して、福祉に供与するというのも素晴らしい。何とかその資金をMuhhibahセンターにも活用させてほしいと考えるのは安定財源の乏しいNGOの弱みかも？

本題に戻ると、村の全家庭で車を持っているはずもなく、小さなヴァンの乗り合いバスみたいなものを活用している。道路で走る車に手をあげての便乗もよく見られる光景である。

このようにどのかで質素な暮らしが、単に“貧しいから”という理由だけでは、あまりにも哀しい。いつまで続くかわからないこの暮らし。経済発展とともに、この村の人々が危険な方向に舵をとらないようにと祈るばかりである。

必ずしも天災ばかりではない今の日本の惨状…。自然と環境を語るに於ては、あまりにも大きな犠牲。静かに復興を願いつつ、社会の有り様が根本から変革へと向かえるように、そして、私自身も少しずつ賢く暮らす努力をしよう。

ACSだより ベナン在住 内海 明美

東京都社会福祉協議会児童部会「青年国際交流プログラム」



高校生の作業場面

東京都社会福祉協議会児童部会「青年国際交流プログラム」第11回、2011年2月15日から2月19日の5日間、ベナン島で始められました。今年はい11回目、約10年間続けられ

ています。真夏の太陽が容赦なく注ぐじっとしていても、汗が流れ出す天候の中、ペンキ塗り、整地、畑づくりなど、現地スタッフが日ごろからやりたくても出来ないところを若い高校生の力(そんなに若くない施設長のかたがたも共に汗を流し、裏方に徹し高校生が力を発揮できるよう計画を検討してください)をおかりし短時間のうちに課題をクリアします。今年、2組に分かれ作業所の畑つく

り、ゲートのペンキ塗りでした。畑づくりは男子が力を振るい、あっという間に完成。その後は女子組のペンキ塗りに加わりました。特に今年地域でのホームステイでもホームステイ先の家族や隣人との交流も驚くほどに家族に溶け込んでいました。ホームステイを終了し、迎えのバスに乗り込む際、ホームステイ先の家族との別れを惜しみなかなか出発できないでいる子、泣き顔を見られないようにサングラスをかける子、2日間の短い滞在でしたが参加した子どもたちは村人たちとの絆が出来ました。いつでもまたこの村に来てください。継続は力といわれますがそれ以上にベナンACSでは「青年国際交流プログラム」を通して大変な力をいただいています。



RCSはいま 中澤 和代

養魚池周辺のこと & 新メンバー

国際ボランティア貯金の配分金をいただいて、2009年の秋に大きな2つの池ができました。2010年1月には、稚魚を放流し、今では、その魚が手の平の倍以上に大きく育ち、赤ちゃん魚もたくさんになっています。池の周辺には、マラッカさんやメンバーの力で、椰子の木が植わり、他の草木も育っていることから、とても自然な池となりました。池の中に突き出すように小さな小屋もできています。

さて、この池の魚を一週間に一度、メンバーと共に釣り時間を設け、その後、ローズさんに料理をしてもらって、みんなで昼食にいただいておりますが、最近は、魚の方が賢くなり、なかなか「釣り」だけとは行かず、時には網を使うこともあります。メンバーはもちろんのこと、若いスタッフやマラッカさんも池に飛び込み、ワイワイキヤーカー楽しみながらの魚穫りなのです。若い女性スタッフが2人ともずぶ濡れになった姿、

想像できますか? スゴイ! 流石イバンの女! と感嘆してしまう一瞬です。これにも通ずるのですが、2月はじめから「フィレックス」という6歳の男子がムヒバに通いはじめました。自閉的で、行動力があるので、危険ということもあり、今は母子通所です。水が好きなのですが、台所や洗面所の水をまき散らすならまだしも、先日、いきなり全力疾走でこの池に飛び込みました。もちろん、フィレックスは泳げません。後を追ったスタッフのジェニー、間髪入れず飛び込みました。これもスゴイ! の一言! この時からフィレックスは、ジェニーに好き好き! とキスするようになりました。難しく、大変なところのあるフィレックスに対して「いつか必ず変化する、可愛いフィレックス!」というスタッフ、ポーリン。こんなスタッフたちに支えられてRCS・ムヒバセンターは、2011年度を明るくスタートしております。



お母さんと一緒にフィレックス

じゃらんじゃらん ちゃりがわん♪ (22回)

ほわほわの子供

上杉 誠

ボルネオは大自然に溢れていますので、山の中、町の中、海に出ている色々な鳥を見ることが出来ます。普通は大人の鳥しか見ることが出来ませんが、運が良い場合にはかわいい鳥の赤ちゃんを見ることが出来る場合もあります。写真の鳥はエリグロアジサシという海鳥の赤ちゃんです。

「アジサシ」普段居酒屋やお寿司やさんで聞き慣れた言葉ですが、居酒屋で聞く「鯔刺」と同じ言葉の鳥なんです。小さな魚を食べて暮らしていますが、捕まえるときには海に向かって豪快にダイブ！その姿がいかにもアジを刺しているかのように鋭く飛び込む事から付けられた名前です。

まあ、実際に刺してしまったらそのまま口が開きませんので、ちゃんとくわえて捕まえるんですけどね。そのアジサシ達の仲間の中でも一番豪快なダイブを見せてく

れるのがこのエリグロアジサシ。親の姿は真っ白な体に黒い鉢巻きがワンポイントの綺麗な鳥ですが赤ちゃんの頃は、白地に胡麻塩模様。真っ赤なくちばしが綺麗です。

エリグロアジサシはいかにも鳥の巣！って言う感じの巣を全く作らない鳥で、岩の上に直接卵を産んで子育てをします。赤ちゃんの胡麻塩模様は岩の色にそっくりで敵に見つからないようにするための工夫なのです。ついでに岩の上に直接卵を生んでおけば、南国の強い太陽の熱が岩を温めてくれるので、お母さんは卵を温める手間が省けてしまいます、ずぼらなお母さんなのですね。

鳥の赤ちゃんは生まれたてに全く毛が生えてないかわいくないタイプと、ホワホワの産毛に包まれたかわいいタイプの2種類に分かれますが、エリグロアジサシの赤ちゃんはホワホワのまさにかわい



エリグロアジサシの赤ちゃん

い姿で産まれてきます。

ボルネオにお越しの際には、町の植え込みの中や庭の植木の陰をそっと覗いて見て下さい。もしかしたら健気に育っている鳥の赤ちゃんにであえるかもしれません。

Julan julan cari kuman はマレー語で友達を探しに行こうの意味です。

ACE通常総会のお知らせ

日程：6月18日(土)13:30分～18:45分

場所：南青山会館(農林水産省共済組合)

総会：現地報告：現地訪問からの報告(瀬沼哲歩くん)

特別講演：童謡は愛と平和のメッセージ(伊良皆 善子氏)

※ ホームページが新しくなりました <http://ace-jps.com/>

ACEに入会のお誘い

*この会(ACE)は…?

アジア地域福祉と交流の会(ACE)は、人種、宗教、性別、障害の有無などにとらわれず、「お互いの違いを認めて支え合う」という考えを基本に、アジア地域を視野に活動しているNPO法人です。

具体的な活動としては、主にマレーシアで知的障害児(者)の福祉活動をしているペナンのACSとサラワクのRCSの活動を支援しています。

*賛助会員種別と年会費

一般会員(1万円) 特別会員(3万円)

学生会員(5千円) 団体会員(5万円)

終身会員(納入1回限り 15万円)

任意会費会員(年会費2000円以上)

*ご入会の方法

ホームページ、E-mail、あるいはFaxか郵便で事務局にご連絡ください。アドレス、URL、Fax番号は、1ページ紙名の下にあります。

編集後記

- ・2010年年度末は、3月11日に起きた東日本大震災と津波原発事故で、世界中に激震が走りました。被災者の方々のことを思うと、言葉がありません。一日も早い復興と春に向かえる気力を得られることを祈りつつ私も自分にできることで協力したいと思います。3月の第10回ワークキャンプにご参加された方々の力で、新たなコンクリートの池ができました。違った魚が育つ日も間近いことでしょう。ありがとうございました。(Kazuyo)
- ・3.11の大地震、巨大津波に加えての原発事故のニュースは、マレーシアでも即刻伝えられたため、多くの人たちが電話やメールで日本のことを心配して下さいました。感謝です。ペナンのアイナからのメールで、Stepping stoneのメンバーたちの発意で募金活動が始まったことを知り、感激しました。世界中が注目する日本。原子力に依存しない日本を宣言して、今度こそ世界をリードして欲しいと、切に祈っています。明日の世界の子らのために。(Ken)